放眼日中

タイで日本人が作った有機野菜を中国へ

コラムニスト・アジアンウオッチャー
須賀　努

すが・つとむ　東京外語大中国語科卒。金融機関で上海留学、台湾2年、香港通算9年、北京同5年の駐在を経験。現在は中国を中心に東南アジアを広くカバーし、コラムの執筆活動に取り組む。

「タイで農業を始める日本人が増えている」。最近こんな話を耳にした。バンコク滞在中に数人の日本人とタイ人に確認すると、「タイ北部産のコメは日本産と遜色がなく、安くて美味い」「タイで本格的な有機野菜を作って出荷しており、カンボジアで技術指導もしている」など、いろいろな動きがあることが分かった。

ある日本出身の農業関係者に聞くと、「日本では自分のやりたい農業はできない」と言う。理由については口を濁したが、「やる気のある、本当に農業をやりたい人は海外へ出るしかない。海外でもタイは条件がかなり良い」のだとも言う。

タイで有機野菜を作り、バンコク市内でその販売に加えてレストランも営んでいる店に出向くと、日本人客だけでなく、欧米人やタイ人の姿も目に付く。一般のタイ産の野菜に比べれば相当高いが、最近タイも健康ブームで、食品の安全性に気を配る人が出てきている。「中国から野菜や果物が流れて来るが、正直言って安全性を疑ってしまう。その点、日本人が作っていると聞くと安心感がある」との声もあった。日本の食品は昨年の東日本大震災以降、放射能問題で一時信頼性が揺らいだが、タイではほとんどの人が気にならないと言っており、むしろ日本の品質の良さ、安全性には信頼が置かれていると感じる。

タイで作った有機野菜を国内外にどんどん広めていこうと考えている人たちもいる。彼らは「最近、バンコクには日本資本の日本食レストランが大挙して押し寄せている。まずはそこに有機野菜を売り込む。また、タイの中産階級の勃興によりその消費力が高まり、高額の野菜を購入できる層が増えている。そして次にはタイから日本へ輸出する。これも値段次第ではかなりの需要が見込める」と、その構想を熱く語る。

同時に、カンボジアやラオスにも日本の高い農業技術を広め、有機野菜を広めていくという。これらの国には本格的に有機栽培ができる土地がある。天候やその他の条件でタイが不作の場合、そのバックアップにもなる上、何よりもタイ、カンボジア、ラオス、ミャンマーなどはもともと農業国であるため、工場の誘致ばかりをせずに、農業を発展させる方が、彼らのためにもなろう。

そして、最大の狙いは中国である。既に中国とタイを含む東南アジア諸国連合（ASEAN）の加盟国は自由貿易協定（FTA）を締結し、関税は原則ゼロとなっている（日中間にFTAはない）。旺盛な中国の消費力は魅力的であり、日本からコメや果物、野菜などを輸出するより、タイから陸路で輸出した方が、税制面でも流通面でも優位になると思われる。日本の放射能問題が政治問題とも絡んで時々出てくる日中間に比べ、タイで作った有機野菜は、中国の消費者にスムーズに受け入れられるのではないかと期待されている。

さて、この試みのように、日本政府も自国の農業のことばかりを考えず、大きな戦略を立ててみるべきではないだろうか。